![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()２０１５　園長だより　９月号　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　園長　　平澤　正則

教育の質の向上とは　　その１

「教育の質の向上」という言葉を時々耳にします。公立学校にいた時はめったに耳にしなかった言葉なので認定こども園や幼稚園，保育園等（以下“園”）で主に使われている言葉だと思います。使っているのは保護者ではなく，教育行政側や園の経営者，取り巻きの業界であるようです。少子化が進み，園の間には幼児の奪い合いが静かに進んでいます。目に見えるようなあからさまな奪い合いがあるわけではありませんが，子どもの数が年々減少する中で自分の園だけは数を減らすまいと努力するのですから，まあそれに近いものなのです。そんな中，一人でも多く園児を獲得するには何が必要かと考えた時，施設や設備が良いとか自宅

から近いとか預かってくれる時間が長いとか料金が安いとか様々な理由が考えられる中で，最も多くの人に

支持される理由が「教育の質」だというわけです。

　では「教育の質」とは何なのか，先日の保護者会の折に少しの実例を挙げながら話しましたが，来られなかった方もいらっしゃいますので今回はそれを書きます。これは大変間口が広く奥行きが深い話で，簡単に言い尽くせるようなものではないことを初めにお断りします。「質」の中にもいろいろありますが，お察しのとおり，なんといっても「人」です。「教育は人である」などといわれ，教える人のでき（質）次第で子どもの成長の度合いが変わる程だというのは私などが今更言うまでもない事です。では，どういうできが良いできなのか例を挙げますが，これが実に難しい。私が職員室にいると時々園児たちがけがをしたといって治療を受けに来ます。けがの内容は軽微なものがほとんどで，ただわずかに白くこすれた跡があるのでそれとわかる程度であるとか，泥や砂が付いている程度であるとか，うっすらと血がにじんでいる程度であるとか，少し出血しているとか，その程度は様々です。一つ一つが違うそれぞれにどう対応するかですが，洗うだけのこともあるし，絆創膏を貼るだけのこともあります。消毒液を使った方が良いと思える時もあれば，医師によっては消毒液は使わない方が良いという人もいるのでどうしようか瞬時には迷うこともままあります。そんな場面に数多く遭遇し，見聞きしてきて，今私が感じること。それは，「対応は人により違って当然である。」ということです。あっさりし過ぎでしょうか？でも，これ以上の答えはないのです。家に帰った我が子のけがを見て，その手当ての方法に不満をもつこともあるでしょうが，結果を見ただけでは手当てを見たことにはなりません。対応した人がどのような態度で，表情で，言葉かけをしたか。担任の先生や保護者にどのように連絡したか。けがをした時の相手の児童や取り巻きにどう話したか。けがをした場所や物をどう修復したか，しようとしているか。その一つ一つにいかに丁寧に対応しているかが大切なのです。つまり，質とは言い換えれば，丁寧さとも言えます。しかし，『そんな程度でいちいち心配するな！』などと言ってロクな手当てもしない人は良い人（先生，親，友だちなど）ではないということでしょうか。そんなことはありません。人間社会にはいろいろな人がいて，常に自分の居心地が良い状態が保てているなどということはないのであり，そういうものであるということはそういう経験を数多く積むことによってしか知り得ません。それは幼児期にも少しは知らなければならないことです。つまり，不親切な人も教育上は役に立っているのです。教育というものはそういうものだと認識しなければなりません。しかし，保護者がこれをやりすぎると子どもは委縮した生き物になってしまいますので，誰がやるかといえば，やはり，その他で近くにいる大人＝先生となるのでしょう。以上のような理由により，教育の質などというものは簡単に語れるものではないということを大人が知らなければならないということです。

　では，「質の向上」とは何か。これは教える側，育てる側，つまり大人の責任となる行為の状態の事です。多くの場数を踏ませているか，その時の子どもの気持ちに寄り添っているか。この２つが大切です。